杜若

觀世流改訂謡本

内 九

三番目

杜若（カキツバタ）

四月

シテ　杜若の精女
ワキ　旅僧

ワキ　これハ諸國一見の僧にて候。われ此間ハ都に候ひて。洛陽の名所舊跡殘なく一見仕りて候。又これより東國行脚と心ざし候

道行上　夕べ夕べの假枕。夕べ夕べの假枕。宿ハあまたに變れども。同じ憂き寝の美濃尾張。三河の國に

着きにけり三河の國につきにけり

急ぎ候間。程なく三河の國に着きて候。又これなる澤邊に杜若の今を盛と見えて候。立寄り眺めばやと思ひ候

げにや光陰とゞまらず春過ぎ夏もきて。草木心なしと申せども。時を忘れぬ花の色。顔佳花とも申すやらん。

此杜若ハ

中 あら美しの杜若やな シテ詞 のう/\
御僧何しに其澤には休らひ給ひ候ぞ
ワキ これは諸國一見の者にて候。杜若の
面白さに眺め居て候。さてこゝをばいづく
と申候ぞ シテ これこそ三河の國八橋とて。
杜若の名所にて候へ。さすがに此杜若は。
名にあふ花の名どころなれば。色も一入

濃紫の。なべての花のゆかりとも。思ひなぞらへ給ひぞして。取りわき眺め給へかし。あら心なの旅人やな　ワキ詞「げに〳〵三河の國八橋の杜若は。古歌にも詠まれけるとなり。いづれの歌人の言の葉やらん承りたくこそ候へ　シテ「伊勢物語にいはく。こゝをば八橋といひけるは。水行く

河の蜘蛛手なれば橋を八つ渡せる
なり。其澤に杜若のいと面白く咲き
乱れたるを。或人杜若といふ五文字を
句のかみに置きて。旅の心を詠めと云ひ
ければ。唐衣きつゝなれにし妻しあ
れば。遥〴〵来ぬる旅をしぞ思ふ。これ在
原の業平の。此杜若を詠みし歌なり

ワキカヽル上「あら面白やさてハ此東のはての國ゞまでも。業平ハ下り給ひけるか

シテ詞上「事新しき問事かな。此八橋のこのみか。猶しも心の奥深き。カヽル上名所名所の道すがら

ワキ「國ゞところハ多けれども。取りわき心の末かけて」

シテ「思ひ渡りし八橋の

ワキ「三河の澤の杜若

シテ「遥ゞ来ぬる旅をしぞ

ワキ「思の色を世に残して　シテ「主は昔に業
平なれども　ワキ「かたみの花は　シテ「今こゝに
地上歌●在原の。跡な隔てそ杜若。跡な隔てそ
杜若。沢辺の水の浅からず。契りし
人も八橋の蜘蛛手に物ぞ思はるゝ。
今とても旅人に。昔を語るけふの暮
やがて馴れぬる心かなやがて馴れぬる

ところかな。　シテ詞「いかに申すべき事の候
ワキ「何事にて候ぞ　シテ「見苦しく候へども。
わらはが庵にて一夜を御明かし候へ
ワキ「あら嬉しや頓て参り候べし」　物着　シテ「のうく
此冠唐衣御覧候へ　ワキ「不思議
やな卑しき賤のふしどより。色もかゝ
やく衣を著。透額の冠を着し。これ見

よそ粧る。これはそもいかなる事にて候ぞ

シテ「これこそ此歌に詠まれたる唐衣。高子の后の御衣にて候へ。又此冠は業平の。豊の明の五節の舞の冠なれば。かたみの冠唐衣。身に添へ持ちて候なり

ワキ「冠唐衣はまづ〳〵置きぬ。さて〳〵御身はいかなる人ぞ

シテ「眞はわれは杜若

の精なり。植置きし昔の宿の杜若と。よみしも女の杜若に。なりしいはれの言葉なり。又業平ハ極楽の。歌舞の菩薩の化現なれバ。詠み置く和歌の言の葉までも。皆法身説法の妙文なれバ。草木までも露の恵の。佛果の縁を弔ふなり

ワキ　これハ末世の奇特

者。正しき非情の草木よ。詞をかはし
も法の聲 シテ 佛事をなすや業平の。
昔男の舞の姿 ワキ これぞ即ち歌舞
の菩薩の シテ 假に衆生と業平の
ワキ 本地寂光の都を出でゝ シテ 普く
濟度 ワキ 利生の シテ 道よ 地上 遙〻き
ぬる唐衣。遙〻きぬる唐衣。著つゝや

舞をかなづらん　（シテ上）別れし。跡の
怨の唐衣　（地）袖を都に。返さばや
（シテクリ上）そもそも此物語は。いかなる人の何事に
よつて　（地）思の露の信夫山。忍びて
通ふ道芝の。始めもなく終りもなし
（シテサシ上）昔男初冠して奈良の京。春日の里に
知るよしして狩に往にけり　（地）仁明

（サシクセ独吟）

●仕舞

地

天皇の御宇かとよ。いとも畏き勅を受けて。大内山の春霞。たつや弥生の初つ方。春日の祭の勅使として透額の冠を許さる　君の恵の深き故殿上にての元服の事。当時其例稀なる故とかや。初冠とハ申すとかや。然れども世の中の。一度ハ栄え。一度ハ衰

ふる理の眞なりける身のゆくへ。住み
どころおもむきて東の方に行く雲の。
伊勢や尾張の海面に立つ波を見て。
いとゞしく過ぎにし方の戀しきに。
羨しくも歸る浪かなとうち詠めゆ
けば信濃なる。淺間の嶽なれや。くゆる
煙の夕氣色　さてこそ信濃なる。

淺間の嶽に立つ煙 地 遠近人の見
やハとがめぬと口ずさみ猶遥〴〵の旅衣。
三河の國に著きしかバ。こゝぞ名にある
八橋の。澤邊に匂ふ杜若。花紫のゆ
かりあれバ。妻しあるやと思ひぞ出づる
都人。然るに此物語。其品多き事な
がら。取りわき此八橋や。三河の水の底

ひなく。契りし人〴〵の數〳〵に。名をかへ
品をかへて。人待つ女物病み玉簾の。
光も亂れてとぶ螢の。雲の上まで往
ぬべくは。秋風吹くと假に現れ衆生
濟度のわれぞとは知るや否や世の人の

シテ上 闇きよ行かぬ有明の　地 光普き月
やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身

つは。もとの身にして。本覺眞如の
身をわけ陰陽の神といはれしも。唯
業平の事ぞかし。かやうに申す物語
疑はせ給ふな旅人遥々きぬる唐衣。
きつゝや舞をかなづらん。（コイ合）（シテ）花前
に蝶舞ふ。紛々たるゆき（地上）柳上に
鶯飛ぶ。片々たる金（序ノ舞）（シテ上）植ゑ置きし。

昔の宿の。かきつばた 地上 色ぞ殘りこそ昔なりけれ。色ぞ殘りこそ昔なりけれ色ぞ殘りこそ シテ 昔男の名をとめて。花橘の。匂ふうつる。菖蒲の鬘の 地上 色はいづれ。似たりや似たり。杜若花菖蒲。梢よ鳴くは シテ 蟬の唐ころもの 地上 袖白妙の卯の花の

雲の夜も白みて。明くる東雲の浅
紫の。杜若の。花も悟りの。心開けて。
すはや今こそ草木國土。すはや今こそ。
草木國土。悉皆成佛の。御法を得て
こそ。失せにけれ。

文学博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

使用家の特権

観世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別格組二十八番二十八冊の各一組、或は三組とも悉く買ひ揃へられ候節は、返送料を添へて発行所へ送附せられ候はゞ、最寄り所にて無料にて五番綴の美本に仕立直し返送可申上候。如斯して使用家は期せずして一揃の五番綴謡本を得らるべく候

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

大正六年六月廿九日印刷
大正六年七月四日発行

著作権所有

発行者 東京市神田区今川小路三丁目九番地 土屋源太郎
印刷者 東京市神田区佐久間町二丁目一番地 七條愷
印刷所 七條式金属版印刷所

発行所 東京市神田区今川小路三丁目九番地
電話本局三六〇九、振替東京一三四七五
観世流改訂本刊行会

茂

観世流改訂謡本

内十

脇能

賀茂

六月

ツレ　天女（前ハ里女）
シテ　別雷神（前ハ里女）
ワキ　神職
ワキヅレ　同

ワキ次第上（三人）ツヨク
清き水上尋ねてや。清き水上尋ねてや。賀茂の宮居に參らん
ワキ詞
そもそもこれは播州室の明神に仕へ申す神職の者なり。さても都の賀茂と。當社室の明神とは一體にて御座候へども。未だ參詣申さず候程に。此度

思ひ立ち都の賀茂へと急ぎ候

道行上（三人）播磨潟。室のとぼその曙に。室のとぼ
その曙に。たつ旅衣色染むる飾磨
のかちぢ行く舟も。上る雲居や久方の。
月の都の山陰の。賀茂の宮居に著
きにけり賀茂の宮居につきにけり

真ノ一声 シテツレ二人上
〽御手洗や。清き心にすむ水の。賀茂

の河原よ。出づるなり　まぐよ頼
まだ人の世も。神ぞ糺の。道ならん
ちかぜゆく空水無月の影更けて。
秋程もなき夕祓川。風も涼しき夕
波よ。心も澄める水桶の。もち顔なら
ぬ身よしあれど。命の程ハ千早ぶる。
神よ歩を運よ身の。宮居くもらぬ。

心ながら頼む誓ひ此神よよるべの。水を汲まうよ。御手洗の。聲も涼しき夏陰や。聲も涼しき夏陰や。糺の森の梢より。初音ぞゆく子規。猶過ぎがてよ行きやらで。今一通り村雨の。雲もかげろふ夕づく日。夏なき水の川曲汲まずとも影はうつそから

汲までも影はうつらじ。（ワキ）いかに
これなる水汲む女性に尋ね申すべき
事の候（シテ）これは此あたりにては見なれ
申さぬ御事なり。いづくよりの御參詣
にて候ぞ（ワキ）げによくよく御覽じ候もの
かな。これは播州室の明神の神職の
者にて候が。始めて當社に參りて候。

まづくこれなる川邊を見れば。新しく壇を築き。白木綿よ白羽の矢を立て。あまつさへ渇仰の氣色見えたり。こハそも何と申したる事にて候ぞ

シテ「さてハ室の明神よりの御祭詣にて候ぞや。又これなる御矢ハ。當社の御神體とも。御神物とも。唯此御矢

の御事なり。あからさまなる御事な
りとも。渇仰申させ給ひ候へ　げに
ありがたき御事なり。さて〳〵當社の
神秘において。様〻あるべき其うちに。
わきて此矢の御いはれ。委しく語り
給ふべし　總じて神の御事を。あざ
あざしく申さねども。あらく一義を

顕きべし。昔此賀茂の里よ。秦氏女(ハダノウヂニヨ)と
いひし人。朝な夕な此川邊よ出でゝ水
を汲み神よ手向けけるよ。ある時河上(カワカミ)
より白羽の矢一つ流れ来り。此水桶よ
止(トマ)りしを取りて帰り庵(イオリ)の軒よさしぬ。
主(アルジ)思はずして懐胎し男子(ナンシ)を生めり。此
子三歳と申しゝ時。人々圓居(マトヰ)して父

三歳と申しゝ時

神これなり とも

いと問へば。此矢を指して向ひしに。此矢即ち鳴る雷となり。天に上り神となる。別雷の神これなり　ツレ上 其母みこも神となりて。賀茂三所の神所とかや

シテ さやうに申せば憚りの。真の神秘は愚かなる。シテツレ二人 身に辨へはいはずとも。いさ白真弓やたけの人の。治めん御代を

告白羽の。八百萬代の。末までも。弓
筆に殘す。心あり　よく〳〵聞けば
ありがたや。さてしも其矢は如何なる代の。
今末の代に中らぬ矢までも。御神
體なるいはれはいかに　げによく不
審し給へども。隔てはあらじ何事も
心からにて澄むも濁るも　同じ流

の樣ぞよ　ワキ「賀茂の河瀬も變る名の
シテ「下は白川　ワキ「上は賀茂川　シテ「又其うち
も　ワキ「變る名の　地上歌「石川や。瀬見
の小川の清けれぞ。瀬見の小川の清
けれぞ。月も流を尋ねてぞ。すむも濁
るも同じ江の。淺からぬ心もて。何疑ひ
のあるべき。年の矢の。早くも過ぐる光

●獨吟

陰惜みても帰らぬハもとの水。流れ
よも盡きじ絶えせぬぞ手向なりける。
下歌中
いざ〳〵水を汲まうよいざ〳〵水を
汲まうよ
ロンギ上
・汲むや心もいさぎよき。
賀茂の河瀬の水上ハいかなる所なる
シテ上
らんいづくとか。岩根松が根凌ぎ
来る。たきつながれ白玉の。音ある水

やー貴船川ー
地上 水も無く見えし大井河。それハ紅葉の雨とふる
シテ 嵐の底の、戸難瀬なる波も名のみや流るらん
地上 清瀧川の水汲まバ。高嶺の深雪解けぬべき
シテ 朝日待ちゐて汲まうよ
地 汲まぬ音羽の瀧浪ハ
シテ 受けて頭の雪そのみ
地 戴く桶も
シテ 身の上と

地 誰も知れ老いらくの。暮るゝも同じ程
なき世の日も夢の現ぞとうつろふ
影はありながら。濁なくぞ水掬ぶの神
の恵。汲まうよ神の御恵汲まうよ・
ワキ げにありがたき御事かな。かやうに
委しく語り給ふ。御身はいかなる人や
らん シテ 誰とは今は愚なり。汝知らずや

神慮に趣き。迎へ給ひて君を守の。此
神徳を告げ知らしめんと。現れ出でゝ
地上
恥かしや我が姿。恥かしや我が姿の。
眞を現きぞあさましやあさましや
なりけん。よし名だかりし白眞弓の。
やごとなき神ぞかし。木綿四手に
立ち紛れて神隠れになりにけりや。

中入来序

神隠れはなりけり

出端

後ヅレ上　あらありがたのをりからやな。われ此

（あらありがたやなトモ）

宮居は地をしめて。法界無縁の衆

生をだは。一子と思し見そなはすも御祖

の神徳仰ぐべしやな。曇らぬ御代を。

守るなり

地上　守るべし守るべしやな。君の

恵も今此時

ツレ　時至るなり時いたる

地 感應あれぞ影向微妙の。相好荘嚴まのあたりよ。ありがたや

天女舞

上歌 賀茂の山並み手洗の影。賀茂の山並み手洗の影。映り映ろよ緑の袖を。水よ浸して。涼とる。涼とる。裳裾を濕もちりからよ。又 山河草木動揺して。まのあたりなる別雷の。神體

來現し給へり

後シテ上 われはこれ。王城を守る君臣の道。別雷の神なり

地上 あるひは諸天善神となつて。虚空を飛行し

シテ 又は國土を垂跡の方便

地上 和光同塵結縁の姿あらありがたの。御事やな

シテ上 風雨随時の御空の雲居

地 風雨随時の御空の雲居

●仕舞

シテ 別雷の雲霧を穿ち 地 光稲妻の
稲葉の露にも シテ 宿る程だに鳴る
雷の 地上 雨を起してふりくる足音も
シテ ほろ／＼ 地 ほろ／＼とゞろ／＼と踏み
とゞろかして。鳴る神の鼓の。時も至れば
五穀成就も國土を守護し。治まる
時より此神徳を。威光を顯しおはしま

して。御祖の神ハ。糺の森よ。飛びきり
飛びきりのらせ給へぞ猶立ち添よや。
雲霧をと。小別雷の。神も天路よ攀ぢ
昇り。神も天路よ攀ぢ昇つて。虚空
よ上らせ給ひけり。

文學博士 井上頼圀 序文監修
丸岡桂 本文訂正
観世清之 節附訂正

使用家の特權

観世流改訂謡本ハ稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別輯組二十八番二十八冊の各一組或は三組を悉く直接に御申込の節、通信料を添へて發行所へ送附せらるれば、裝訂及送料無料にて五番綴の美本に仕立直し、更に返送可申上候。かくして使用家は一冊は五番綴謡本として併ゆるべく候

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

大正七年五月二十日印刷
大正七年五月三十日發行

著作權所有

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所

發行所 東京市神田區今川小路二丁目九番地
電話本局三七六九、振替東京一二四六五
観世流改訂本刊行會

[illegible]風

觀世流改訂謠本

内 十



松風

解題 古名を一に松風村雨といへり。昔在原行平朝臣が須磨に流され居たる頃寵を受けし姉妹の海少女（松風村雨）の亡靈、其遺跡を弔ひし旅僧に宿を與へて古へを物語りし事を作れり。古今集に出でたる行平の歌の詞書を本とし、これに源氏の君の須磨に流され居たる事を結びつけ、源氏物語須磨の巻の文及多數の和歌を綴り合せて巧に作りなしたる曲なり。謠曲に關する大方の古書に此曲名の見えざるものなし。能作書に「松風村雨、昔汐汲也」と見え、申樂談儀に世子の作として擧げたるを思ひ合すれば古く汐汲の曲ありしを世阿彌が改作したると見るべきか。されども別に申樂談儀に「さかがみの能に云々水衣をたみて着し時、世に褒美せし也。それより殊の外はやりて、鹽汲などいふ能に着る。甚をかしき事也」と記し、同じ書に松風とも松風村雨とも記せる記事多きを以て見れば鹽汲と松風と別曲かと思はるゝ節無きにも非ず。又粟田口猿樂記には永正二年四月十三日勸進能（金春）の初日に鹽汲を演じたる事見えて、同勸進能の總番組中に松風の曲名無し。是に由れば或は同曲かとも思はる。

能之小書 戯之舞、見留、中の止、五段の物着、曲の出打切、曲中打切、脇留の小書あり。その中戯之舞にては作物の松に短冊を附けて出し、中の舞濟みて後、常ならば「稲葉の山の」と謠ひ出すべき前に「立ち別れ」の句を今一度繰り返し謳ふ。曲の出打切にてはクセの前「憂き身なり」の後に、又曲中打切にては上端の前「猶思ひこそは深けれ」の後に、いづれも打切を入れ、謠も此處を鎮めて謠ふ。

謠ひ方梗概 本三番目物の中にては重き曲として扱はれ居れど、もと賤しき海少女の靈なれば、位は餘り重めず、謠ひ方に靜けさと哀れさとを十分に含めて、或は古を懷しみ、或は戀に身を忘るゝ綿々たる情緒をうつして幽玄の眞意に沿はしむべきことやがて此曲の重みと深みとの存する所以なり。

シテ 前述の心得にて上品に過ぐる事なく、飽くまでもかよわくして美しく、其折々の情思を含みて、派手に輕々しからぬやう扱ふべきものとす。出は眞之一聲なれども、陰ノ一聲なれば脇能の如く陽に發せず、聲を美しく抑へてしつとりと、しみ〴〵としたる所を謳ふべし。**サシ**は常よりも聊か重めに謳ひ出し、「詠め給ふ」の中落し以下を稍さら〳〵と運び、「げにや」より又サシの出に返り、前よりは少しく輕めに扱ひ、通

じて寂しき風情あるを宜しとす。**ニノサシ**は秋浦の夜景寂しき中にも興を覺えたる心もて、稍さらりと重からぬやうに扱ひ、前のサシとは全く趣を異らしむべし。かくて「あら心すごの夜すがらやな」としつとりと謠ひ止む。**ツレ**との掛合になりて又氣を更へ、さらりと淸く承け渡し、順次寄せて「女車」と氣をかけ、「ま」の廻しを強めて大きく謠ひ地へ渡す。**ロンギ**は月に憂さを忘れて汐を汲み運ぶ處なれば、氣を爽に持ちて然も調子の浮く事なく、稍暢びやかに謠ひ行きて「これにも月」の以下少しく興ずる心なるが宜し。**ツレ**との詞は普通に、「暫く」は前へかけて慌てずに、底力有るやう抑へてイロへに謠ひ、さてワキの方へ向く心にて「月の夜影に」云々と稍さらりめに謠ふ。「げにや思ひ内にあれば」の一節は愁傷の心にてしつとりと出、「わくらはに」より運び好く、止めを寂しく納む。「恥かしや」は稍調子高に節を大きくたつぷりと扱ひ、「此上は」云々の**クドキ**にてしんみりとしたる味を序破急程々につけて謠ひ表はし、「鹽燒衣」以下掛合はクドキの餘情を含みて概ねさらりとあるべし。「あら戀しや」は別に出て靜に止む。クセの上端は派手にならぬやう稍大きく扱ふ。「三つ瀨河」は一息間をおきてしつとりと出、「あら嬉しや」は前へかけて調子を一變し、これより狂氣づきたる心にて聲を上に取り、引締めて運びよくする〳〵と謠ひ、**ツレ**との掛合に入りて「うたての人の」は氣をかけて出、以下確りと運び、「つらね給ひし」にてサシの調子に返し、掛合順次迫りて聊も弛み無く、斯くて止メの「御歌や」を十分氣を掛けて大きく謠ひ地へ渡すべし。「稻葉の山の」は少しく緩めて出、「それは」と前の調子のまゝにて乘る。

ツレ　位を取るとにはあらねど、大事にして餘り輕々しからぬやう、好くシテに從ひて謠ふが宜し。一聲二ノ句はシテよりも聲高にすらりと扱ひ、シテとの問答、掛合はシテの氣合を會得して凡てさらりと承け渡す。

ワキ　さらりとしたる運びの中に、靜なる位取りにて曲の趣致を害はぬやう力むべし。「さては此松は」は一息おきて稍確りと靜に謠ひ、「かやうに經念佛して」と聊か下目に出て、以下常の調子に復す。殊勝の心なるべし。**ツレ**との問答は丁寧なるべく、「出家と申し旅といひ」云々以下の詞は、長き詞なれば聞き弛みのせぬやう序破急に心を附け、語めきたる心にて語よりも運びすら〳〵と、しかも落着き好く謠ふべきものとす。

地　「かくばかり」は下歌の調子に直し、十分に鎭めて謠ひ、上歌も靜に出、「野中の草の」より僅に浮く心なり。「よせてはかへる」は引立てゝずかりと謠ひかけ、息を切りて「かへる」より稍緩めて謠ひ續け、返シ

も同様に扱ひ、「更け行く」と寂びを持たせ、「過さん」と鎮めて、以下調子を戻し、しつとりと止む。抑揚多ければ十分の稽古を要す。**ロンギ**は心持を更めて稍朗に滯りなくさらりとあるべし。「さしくる」以下文意に添ふ趣有るを要す。「松風も村雨も」は調子を更へてしつとりとつけ、上歌も位靜なれど節はたつぷりと扱ふ。**クセ**は靜に出てゆるやかに謠ひ行き、上端後は少しく引立つれど、聲を抑へめに扱ひ、「取れば面影に」と心持をつけ、これより氣をかけて弛み無く謠ひ續け、「枕より」以下かゝつて「せん方」より漸次鎮めて止む。「立ち別れ」はクリの調子にて花やかに謠ひ、「これはなつかし」より更へて乘り、順次氣をかけて位すゝみ、「なつかしや」と緩めて大きく、**キリ**は改めて長閑に寛りと乘り、「歸る浪の音の」より乘りを外してゆるやかに、謠ひ納めて餘韻嫋々たるべし。

注意すべき謠ひ方

ロンギのうち「影は二つ」の「つ」は常の所よりも譜點一つ多し。これは音尾を重ねて謠ふなり。シテの「月の夜影に見奉れば世を捨人」の最後の音は次が中音なる故誤りて音末を浮かす人あれども、之は浮かしむべからず。又十二枚表のツレの謠「あれは松にてこそ候へ」は前の調子に引き入れられぬやう改めてサシの調子に謠ひ出す。「あさましや其御心」と同じ高さなり。

辭解

西國行脚 西國靈域を遊歴する事。 **津の國** 攝津の古名。 **やうありげなる松** 仔細ありげなる松。この事は源氏物語須磨の卷に「大江殿といひける所はいたく荒れて、松ばかりぞしるしありける」。とあるに思ひつきしなるべし。 **松風村雨** 二人の海少女の名。行平が二人の海少女を近づけ、これに松風村雨と名づけしやうに作れり。須磨の卷の末に村雨の降りしことを記し、續きて明石の卷に松風涼しき夜物語したることなど記せるに思ひ寄りたるにや。 **名は殘る世** 白氏文集に「龍門原上土、埋レ骨不レ埋レ名」。 **綠の秋を**云々 秋の木々の紅葉する中に松の一木のみ綠を留むるを云ひて、昔の跡の寂しく遺れるに喩ふ。 **經念佛** 讀經念佛 **山本の里** 山の麓にある里。 **汐汲車わづかなる**云々 汐汲車とは汐汲みて運ぶ車、その輪の音を受けて浮世の「僅」に響かせ且亡靈の六道に輪廻しあるに喩ふ。僅といひ、又其緣にて廻るといへり。輪廻して僅に短き人世に生を受くる事の果敢なしとなり。輪廻は罪障ある衆生が或は生れ或は死にて常に六道に旋轉し生死の迷妄を脫し得ざること。 **浪こゝもとや**云々 須磨の卷に「一人目をさまして枕をそば

だてゝ四方の嵐を聞き給ふに、浪たゞこゝもとに立ち來る心地して」云々とあるを引く。こゝもとゝは身の邊の意。次句は月を見るに涙のしげくてさらぬだに波に濡れたる袂の濡れまさることよとなり。心づくしの秋風に云々　須磨の卷に「心盡しの秋風に海は少し遠けれど行平の中納言の關吹き越ゆるといひけん浦浪、よる〳〵はげにいと近く聞えて」云々。心づくしの秋とは思ふこと多き秋の謂。古今集の歌詞に本づけり。關吹き越ゆる云々は續古今集に出でたる行平の歌。「旅人の袂すゞしくなりにけり關吹きこゆる須磨の浦風」。又波の寄るといふ夜にいひかけたり。行平の中納言　平城天皇の御子阿保親王の第二子にて弟業平と共に在原姓を賜はり中納言正三位となり、寛平五年薨せり。文德天皇の時勅勘を蒙りて須磨にありし頃、「わくらはに」云々の歌をよみしこと此曲の骨子をなせり。里離れたる　里めきたる人家よりかけ離れたる意。須磨の卷に「昔こそ人の住みかなどもありけれ、今はいと里ばなれ心すごくて、海士の家だに稀に」云々。月より外は云々　新古今集に「有明の月より外に誰をかは山路の友と契りおくべき」。殊に拙き海士　渡世多き中にも取り分けつまらぬ海士といひかけて海小舟に續く。海小舟は漁舟。其海を渡る緣にて渡りかねたる世と　うたかた　水の泡の古語、夢の如き世に住むと言はんも憂きといひかけて憂の音に續けてうたかたと云ひ、水の緣にて汐汲車と云ひ、車を寄するといふ緣にて寄るべなきといへり。袖ともに云々　袖の汐に濡ると共に涙も乾く暇無しとなり。かくばかり經がたく　拾遺集に「かくばかり經がたく見ゆる夜の中に羨しくもすめる月かな」。出汐　上げ汐。影恥しき我が姿　葵上の謠に「あら恥しや今とても忍び車のわが姿」とあるを轉用す。我がの「わ」を車の輪にかけ、車の緣にて引くと續く。影恥しとは己の影の恥しき意。忍び車は人前を憚りて忍び〳〵にやる車。すみは果つべき　水の澄むと己の世に住むとを兼ぬ。日影　日光　寄藻　磯邊に打寄する藻。これは「ヨルモ」と讀むべきを「ヨリモ」と謠ひ慣はしたり。朽ちまさり　海士の捨てたる芥の朽ちさるを己の身のあるかひも無く朽ちゆくに比ぶ。袂といへるは例の涙と汐とに濡るを文の表とせるなり。海士の呼び聲かすかにて云々　須磨の卷に「沖より船どもの謠ひののしりて漕き行くなども聞ゆ。仄にたゞ小き鳥の浮べると見やるゝも云々。月の

顔 須磨の巻に「月の顔のみまもられ給ふ」云々。顔は添へて云へる詞。 鴈の姿や友千鳥 須磨の巻の歌に「かきつらね昔の事ぞ思ほゆる鴈はそのよの友ならねども」とあるにより鴈といひてさらに友の語につゞけ、同じ巻の歌に又「友千鳥諸聲に鳴く曉はひとりねざめの床も頼もし」とあるにより友千鳥といへり。鴈の姿とは前に月の顔と云へるより姿の字を添へたるなり。 野分 秋の烈風。 かゝる所の秋なりけり 須磨の巻に「またなくあはれなるものはかゝる處の秋なりけり」云々。 夜すがら 終夜の意。こゝにては最夜中。 汐衣 汐汲む時に着る衣 女車 女の乗る牛車。よしや汐を汲まんとしても女の爲る事なればといひかけて、次の句に續けんための連鎖とせり。女車に意味なし。 寄せては 車を寄すといふ縁にて云ひかく。 潟をなみ 萬葉集の赤人の歌「和歌の浦に汐みちくれば潟をなみ蘆べをさしてたづ鳴き渡る」を引く。潟をなみとは「干潟の無さに」といふ意なれども波と意の同じき故寄せては歸ると云ひて此語を出し、赤人の歌によりて蘆べのたづ云々と續けたり。たづは鶴の古語。 四方の嵐も 浪こゝもとの解に引ける須磨の巻の詞。 夜寒なにと云々 新後撰集の「秋風に夜寒の衣打ちわびぬ更けゆく月のをちの里人」を借る。 焼く鹽烟 新後撰集に「須磨の浦のあまりにもゆる思かなやく鹽烟人はなびかで」を引きてあま人に云ひかく。 松島や小島の云々 須磨の巻の歌に「松島のあまのとまやも」云々。又「松島に年ふるあまも」などあるより思ひよりて新古今集の「松島や小島の海士の秋の袖月は物思ふならひのみかは」を引く。 運ぶは遠き云々 以下汐を運びつゝ打ち吟ずる心なり。月と汲とを文の綾とせり。まづ源の大臣が六條河原の院に陸奥の千賀の鹽竈を移し、難波の浦より汐を運ばしめたる故事を引く。此事謠曲融に作られたればなり。千賀を近にかく。 賤が鹽木を運びしは 鹽焼く薪を鹽木といふ。阿漕の謠に「伊勢の海阿漕が浦に引く網も」、又「阿漕が鹽木こりもせで」などあるを取り合せ引く。 二見の浦 伊勢といふにつけて同國の名所二見浦を出し、韻を重ねて二度といへり。 松のむら立 前句をうけ金葉集の「玉くしげ二見の浦の貝しげみ蒔繪に見ゆる松の村立」を出す。 汐路や遠くなるみ潟 鳴海潟は尾張の海なり。鳴海潟に遠くなる意を云ひかけたる古歌多ければこれも恐らく引歌あるなるべし。未だ見當らず。 こゝは

鳴尾「汐路やとほく鳴海潟」といひしは鳴海なれどこゝは音の似通ひたる鳴尾ぞといへり。これも引歌にや。未だ見當らず。蘆の屋云々伊勢物語の歌「蘆の屋のなだのしほやきいとまなみつげの小櫛もさゝで來にけり」を引きて綾とす。黄楊に告げを兼ぬ。さし來る櫛をさすといふ縁月は一つ以下數を以て綾とせり。一つの月の汐桶の中に映りて二つあるを云ひて二つと數へ、三つの韻にて滿つ汐といひ、四つの韻にて夜といふ。世を捨て人出家。夜影と云ひ、世を捨て人と云ひしに韻を重ねて「よしく」といへり。松の木柱に竹の垣須磨の巻に「竹あめる垣し渡して石の階、松の柱、おろそかなるものから珍らかにをかし」とあるを引く。蘆火蘆を焚く火。新古今集に「難波人あし火たく屋に宿かりてすゞろに袖のしほたるゝ哉」。わざとも侘びて次の行平の歌によりて暗に源氏の君の侘び住まひせしをいふにや。わくらはに云々行平が敕勘によりて須磨にありし時よみし歌なり。須磨の巻に「おはすべき所は行平の中納言のもしほたれつゝ侘びける家居近きわたりなり」なども見ゆ。わくらはにとは稀にの意なり。逆緣こゝは豫期して弔ひたるに非る意に用ひたり思、うちにあれば云々本朝文粹勘解相公の文に「情動ニ於中一、言形ニ於外一」執心の閻浮の涙此世に執着する心殘りての涙。閻浮は此世の意。汐じみてなじむ事。亡靈となりても猶在りし世を思ひ馴れたる意にて綴る。須磨の巻に「世に汐じみぬる齡の人」云々。こりずまの「こりずまに」といへば前の事に懲りずして猶引きつゞき重ぬる意。その意を兼ねて浦の名を云ひ、浦の音を受けて恨めしかりけると續けたり。枕草紙の「浦は」の條にこりずまの浦とあり。須磨の浦を斯くも云ひしなり。須磨の巻の歌に「こりずまの浦のみるめもゆかしきを」云々。三年が程行平三年の間須磨に謫居せるものとして作れり。この左遷の事は古今集の行平の歌の詞書に「田村(文德)の御時こゝにあたりて」とあるによりて知らるゝも三年といふ證なし。これは明石の巻に源氏の君の謫居(須磨)の許されんとしたるを后の諫めし詞に「罪におちて都を去りし人を三年をだに過ぎず許されんことは世の人もいかゞ云ひ傳へ侍らむ」などあるより出でたるか。おとゞひ姉妹兄弟をりにふれたる處と時に適したる月にも馴るゝ云々新後撰集に「汐風の波かけ衣秋を經て月に馴れたる須磨の浦人」とあるを引き、更に馴る

ゝと云ひし縁にて新千載集の歌「須磨の海士の鹽焼衣おのれのみ馴れてもかゝる袖の波かな」によりて鹽焼衣に續く。**色かへて緋の衣**云々 須磨の卷に「緋の直衣指貫、さま變りたる心ちするも」云々とあるより出づ。卑しき海少女の心の戀に移りゆく様を喩へたり。かとりは堅織の約にて細糸にて織りし薄き絹、それにて作りし衣をかとりの衣といふ。其音の香取に通ずるより空だきと續く。空だきとは何所とも知れぬやうほのかに香をたきしめたる意。**世を早う去り給ひぬ** 行平の薨じたるは七十六歳なればこれは作者の作り事なり。**戀ぐさ** 戀しく思ふ種。それを草に通はしめて次句に續けたり。**なれ衣** 狂氣と爲ると言ひかけて衣の身を巳の日に掛く。**巳の日の祓** 三月上旬の巳の日に水邊に出て身を祓ひ淨むる行事なり。須磨の卷に源氏の君三月朔日上巳に物思ひある者は此祓すべきなりと人に云はれて陰陽師を呼び祓したることを記せるにより此に出す。木綿四手は幣。祓の縁にて綴り、其紙の音を受けて神に續く。**思ぐさ** 思ひの種。草の縁にて次句に續く。**あぢきなや** つまらぬ哉の意。**形見こそ**云々 古今集の歌。下の句は「忘るゝときもあらましものを」。「あだなれ」は「仇なれ」にて正しくは澄みて讀むべきなり。**宵々に**云々 古今集の歌。下の句は「かけておもはぬ時の間もなし」。**住むかひあらばこそ**云々 同じ世に住むかひのあるならば兎も角なれど然らざれば忘れ形見の何のかひも無しとなり。**枕より**云々 古今集の歌。下の句は「せん方なみぞ床中に居る」。無みを涙に云ひかく。**三瀬川**云々 一首の歌なり。古今類句に新續拾遺集にある由記せりと拾葉抄に云へり。其名の歌集無し。三瀬川は三惡道に通ずる三途の川なるが歌意はこれを娑婆に喩へたるにて現世の悲哀多き中にも猶美しき戀といふものありといふ心なるべし。**うたて** 滿足し難き意。**待つとし聞かば**云々 行平の歌「立ち別れいなばの山の峰に生ふる松とし聞かば今かへり來ん」。行平因幡の守となりて任に下れる時の歌なり。立ち別れて行かばといふを因幡の國の山に云ひかけ、松を待つにかけて、待つと聞きなば直にも歸り來んとの意を綴れるなり。次下此歌を綾とす。**終にも聞かば** 結局聞き得るならば。**見みゆる** まみゆる **後の山颪** 須磨の卷に「うしろの山に柴といふものふすぶるなり」とあるにいづ。須磨寺の後にある山。

装束附

シテ（松風）

面深井若女小面の類、鬘、鬘帯、襟白二つ、着附摺箔、赤地縫箔腰巻、白水衣、縫入腰帯、葛扇。物着に水衣脱ぎ、小立烏帽子又は風折烏帽子、長絹着る。

ツレ（村雨）

面連面、鬘、鬘帯、襟赤、着附摺箔、赤地縫箔腰巻、白水衣、縫入腰帯、葛扇、水桶（持つ）。

ワキ（旅僧）

角帽子、着附無地熨斗目、水衣、腰帯、扇、珠數。

三番目

松風（マツカゼ）

九月

ツレ　村雨
シテ　松風
ワキ　僧

ワキ詞（位静ニオツトリト）これは諸國一見の僧にて候。われ未（イマ）だ西國（サイコク）を見ず候程に。此度思ひ立ち西國行脚（アンギヤ）と志して候。（氣ヲカヘテスラリト）あら嬉しや急ぎ候程に。これははや津の國須磨の浦とかや申し候。（氣ヲカヘテ）又これなる磯邊（イソベ）を見れば。やうありげなる松の候。いかさまいはれのあるき

事ハいまだ。此あたりの人に尋ねばやと思ひ候（大キク）。カかん上（殊勝ニ滞リナク）狂言シカぐ（ヨワク拍子不合）さてハ此松ハ。いにしへ
松風村雨とて。二人の海士の舊跡かや。
痛はしや其身ハ土中に埋れぬれども。
名ハ殘る世のしるしとて。かはらぬ色の
松一木。緑の秋を殘すことの哀さよ。
引（氣ヲカヘテ素直ニ）かやうに經念佛して弔ひ候へバ。げに

秋の日の習(ナライ)とて程なう暮れては。あの
山本の里まてハ程遠く候程に。これなる
海士の塩屋に立寄り。一夜を明かさ
ばやと思ひ候（確カリト）
真ノ一声（コイ合）（拍子不合）
シテツレ二人上（声調ヲ抑ヘテ美シク）
汐(シオ)汲車(クミグルマ)。わづかなる。（シテヨリ軽メニ）
浮世に廻る。はかなさよ
テ句
浪こゝも
とや須磨の浦。月さへぬらす袂かな（アシラヒ）
（元ヘ戻シテ）（内ヘトツテ）
シテサシ上（常ヨリ重メニシツトリ）
心づくしの秋風に。海は少し遠けれ

ども。彼の行平の中納言。関吹き越ゆる（声調ヲ一致シテ）
と詠め給ふ。（稍ハコビヨク）浦回の浪の夜々は。（コメテ）げに音
近き海士の家。里離れなる通路の。月
より外は友も無し　シテ上（前ノサシヨリ聊カ軽メニ）げにや浮世の業
ながら。殊につたなき海士小舟の。（淋シク運ビテ）渡り
かねたる夢の世に。住むとや言はん
うたかたの。汐汲車よるべなき身は

海人の。袖ともに思を・ほさぬ。心かな

地下歌

かくばかり経がたく見ゆる世の中に。羨しくも澄む月の出汐をいざや。汲まうよ出汐をいざや汲まうよ

上歌

・影恥かしき我が姿。影恥かしき我が姿。忍び車をひく汐の跡に残れる。溜り水いつまでか澄み果つべき。野中の草の露

ならバ。日影に消えも失ぬべき。これハ
磯邊に寄藻かく。海士の捨草いた
づらに朽ちまさり行く袂かな朽ちま
さり行く袂かな。面白や馴れても
須磨の夕まぐれ。海士の呼び聲幽かにて。
沖に小さき漁舟の。影幽かなる月
の顔。雁の姿や友千鳥。野分汐風いづ

れもげに。かゝる處の秋なりけり。あら心
すごの夜すがらやな シテ上「いざ〳〵汐を
汲まんとて。汀に満干の汐衣の ツレ「袖を
結んで肩にかけ シテ「汐汲むためとハ
思へども ツレ「よしそれとても シテ「女車

●小謡

地上歌「よせてハかへるかたをなみ。よせてハかへる
かたをなみ。蘆邊の田鶴こそハたち

騷げ四方の嵐も。音そへて夜寒何と
すごさん。更け行く月こそさやかなれ。汲
むは影なれや。燒く鹽煙心せよさのみ
など海人の憂き秋のみをすごさん。
松島や小島の海士の月にだに。影を
汲むこそ心あれ影を汲むこそ心あれ。

●獨吟

●ロンギ上（氣ヲ更ヘ朗カニ）

遠くは陸奥の其名や千賀の

塩竈
（シテ上）賤が塩木を運びしは阿漕が浦に引く汐
（地上）その伊勢の海の二見の浦二度世にも出でばや
（シテ上）松のむら立霞む日も汐路や遠く鳴海潟
（地上）それは鳴海潟ここは鳴尾の松蔭に。
月こそさはれ芦の屋
（シテ上）灘の汐汲む憂き身ぞと人にや誰も黄楊の櫛

地上（弛ミナクサラリ）さしくる汐を汲み分けて。見れば月

こそ桶にあれ。シテ（爽ヤカニ）これにも月の入りた

り。地中（サラリ）嬉しやこれも月あり。シテ（閑雅ニ）月は一つ

地（朗カニ滞リナク）影は二つ満つ汐の。夜の車に月を

載せて。憂しとも思はぬ汐路かなや。

（素直ニ）塩屋の主の帰りては。宿をも借らじやと

思ひは。（氣ヲカヘテ丁寧ニ）いつもこれなる塩屋の内へ案内

満つ汐の 長ヤヲハヤヲハヨリナホ長ク三拍子分ノ間ヲ取ル

地拍子ココマデ思はぬトモ

申候　ツレ（サフリ）誰にて渡り候ぞ　ワキ（殊勝ニ）これハ諸國
一見の僧にて候。一夜の宿を御貸し候へ
ツレ（サフリ）暫らく御待ち候へ。主に其由申し候べし」。
（氣ヲカヘテ）いかに申し候。旅人の御入り候が。一夜の
お宿と仰せ候　シテ（優ニシツトリ）餘りに見苦しき塩屋
にて候程に。お宿ハ適ふまじきと申候へ」
ツレ（サフリ）主に其由申して候へバ。塩屋の内見

苦しい程に。お宿ハ適ハまじき由仰

せ候。ワキ(角立タヌヤウニ)いや／＼見苦しきハ苦しからず

まして出家の事にて候へバ。平に一夜を

明かさせて給り候へと重ねて申候へ

ツレ(スラリ)いや適ひ候まじ　シテ(前ヘカケテ)暫らく月の夜影

カヽル上(優ニスラリ)(拍子不合)

に見奉れバ世を捨人よし／＼かゝる

海士の家。松の木柱に竹の垣。夜寒さ

こそと思へども。蘆火にあたりてお泊
候へと申候へ
ツレ「こなたへ御入候へ
ワキ「あら嬉しややがて参らうずるにて候
シテ「始めよりお宿参らせたく候ひつれども。
余りに見苦しく候程に。さて否と申し
候。ワキ「御志ありがたう候。出家と申し
旅といひ泊りはつべき身ならねばとぞ

くを宿と定むべき。其上此須磨の浦に心あらん人は。わざとも侘びてこそ住むべけれ。わくらはに向ふ人あらば須磨の浦に藻汐たれつゝ侘ぶと答へよと。行平も詠じ給ひしとかや。又あの磯辺に一本の松のありしを人に尋ねていへば。松風村雨二人の海士の旧跡

中（スラリ）　羽（前へ戻シテ）　（氣タカヘテ）

さなや申すは程な。逆縁ながら弔ひてこそ
通り候ひつれ。（氣ヲカヘテ）あらふしぎや。松風村雨
の事を申しては。二人ともに御
愁傷は。これは何と申したる事にて
候ぞ　（シテツレ上）（シヲトリナ）げにや思ひ内にあれば色外に
現れ候ふぞや。（運ビヨク）わくらはに問ふ人
あらばその昔物語。餘りになつかしうは

ひて。猶執心の閻浮の涙。二たび袖を
（寂シク）ぬらしさむらふよ

ワキ詞（角立タヌヤウニ）猶執心の閻浮の涙と仰候。今は此世になき人の詞なり。又わくらはの歌もなつかしいかなる謂りにや。かた〴〵不審にこそ候へ。二人ともに名をも御名のり候へ

シテ上（暢ビヤカニタップリ）恥かしや申さん（下ニ及）

ときはわくらはに。言問ふ人もなき

跡の。世まで・汐じみてこりずまの。怨めし
かりける心かな　此上ハ何をかつゝ
み包むべき。これハ過ぎつる夕暮よ。
あの松蔭の苔の下。亡き跡とはれ参
らせつる。松風・村雨二人の女の幽霊
これまで来りたり。さても行平三年が程。
御徒然の御舟遊。月よ心ハ須磨の浦

夜汐を運ぶあま少女よ。おとゞひ選は
れ参らせて。折にふれたる名なれや
とて。松風・村雨と召されしより。月にも
馴るゝ須磨の海士の。塩焼き衣。色
かへて。縑の衣の。空だきなり。かくて
三年も過ぎ行けば。行平都に上り給ひ
いく程なくて世を早う。去り給ひぬと

●クセ留マデ獨吟

聞きしより　シテ 中（内ヘコメテ） あら戀しやさるにても。

又いつの世の音づれを　地 中（シットリト運ビヨク） カヘテ（拍子合） 松風も村雨

も袖のみ濡れてよしなや。身にも

及ばぬ戀をさへ須磨のあまりに罪

深し跡弔ひてたび給へ　打切ヤ　上歌（静ニタップリト） ・戀草の。

露も思ひも亂れつゝ。打切 露も思ひも亂れつゝ。

心狂氣になれ衣の。巳の日の。祓や

浪の上哀よ　上モ

小書ニヨリ　憂き身なり　打切ナシ

地拍子　中納言

木綿四手の。神のたまけも浪の上。哀よ
消えし憂き身なり　あはれ古へを。
思ひ出づればなつかしや。行平の中納言
三年はここに須磨の浦。都へ上り給ひ
しが。此程の形見とて。御立烏帽子狩
衣を。残し置き給へども。これを見る
度に。弥増しの思ひぐさ葉末に結ぶ

小書ニヨリ深けれら打切ヤ

露の間も。忘られざこそあぢきなや。
形見こそ今は仇なれこれなくは。忘るゝ
隙もありなんと。詠みしも理や猶思
ひこそ深けれ。宵々に。脱ぎて我が
寝る狩衣。かけてぞ頼む同じ世に。
住むかひあらばこそ。忘れ形見もよし
なしと。捨てても置かれず取れば面影に

地拍子
ここ一一
涙ニ伏し

に立ち増さり。起臥わかで枕より。あと
より恋の責めくれば。せん方涙に伏し
沈む事ぞ悲しき。三瀬川絶えぬ。
涙のうき瀬にも。乱るる恋の淵はあり
けり。あら嬉しやあれに行平のお立ち
あるが。松風と召されさむらふぞやいで
参らうあさましや其御心故にこそ。

執心の罪にも沈み給へ。娑婆にての

妄執を猶。忘れ給はぬぞや。上（氣ヲカヘテ）あれは松

にてこそ候へ。行平は御入もさむらは

ぬものを　シテ詞（引締メテ運ビヨク）うたての人の言ひ事や。

あの松こそは行平よ。上（優ニスラリ）たとひ暫しは別

るゝとも。待つとし聞かば帰りこんと。

上つらね給ひし言の葉はいかに　ツレ（サラリ）げにや

のう忘れてさむらふぞや。たとひ暫し

別るとも。待たばこんとの言の葉を

シテ中（上オサエ）（漸次ニカヽツテ）こなたは忘れぬ松風の。立ち帰りこん

御音信。ツレ（サラリ）つひにも聞かば村雨の。袖

暫しこそ濡るゝとも。シテ（弛ミナク）まつにかはらで

帰りこば。ツレ（サラリ）あら頼もしの。シテ（充分氣ヲカケテ下）御歌や

地上（カヽツテ花ヤカニ大キク）立ち別れ

●獨吟仕舞

中ノ舞

シテワカ上（緩メテタップリ）●稲葉の山の峯に

（拍子合ノル）
カヽル中ニ（調子ヲカヘズ寛タリト）

まつとし聞かば。今帰りこん

地 中ニ（長閑ニ寛タリト）カヘテ

それハ稲葉の遠山松。これハなつ

× 當キヤウハニ等シキ間ヲ取ル

かし君こゝに。須磨の浦回の松の

（締メテ）（拍子外ス）

行平。立ち帰りこばわれも木蔭にいざ

キリ上ニ（朗カニ運ビテ）

立ち寄りて。磯馴松の。なつかしや

破ノ舞 （拍子合ノル） 打上（ヤヲ）

松に吹きくる風も狂じて。須磨の高

浪はげしき夜すがら。妄執の夢に見

みゆるなり。我が跡とひてたび給へ。暇
申して帰る浪の音の。須磨の浦かけて
吹くや後の山嵐。関路の鳥も聲〳〵に
夢もあとなく夜もあけて村雨と
聞きしも今朝見れば松風ばかりや
残るらん松風ばかりや残るらん。

文學博士 井上頼圀本文監修
丸岡桂本文訂正
觀世清之節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

使用家の特権

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の右一組、或は三組を悉く買ひ揃へられし節、送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裝訂所は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正十三年十一月十日印刷
大正十三年十一月十五日發行
大正版一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區東松下町十二番地 鈴木彌作
印刷所 東京市神田區東松下町十二番地 信英堂印刷所

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話九段二三〇五、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

寛

観世流改訂謡本

内 十

九番習
四番目
畧二番

俊寛

九月

ツレ　丹波少將成經
ツレ　平判官康頼
シテ　僧都俊寛
ワキ　赦免使

赦免使詞

「これは相國に仕へ申す者にて候。さても此度中宮御産の御祈の爲に。非常の大赦行はるゝにより。國々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の中。丹波の少將成經。平判官康頼二人赦免の御使にと。某承つて候。唯今

鬼界が島へと急がん

康頼　成経　次第上　「神をも齋ふが島あれぞ。神をも硫黄が島あれぞ。願もみつの山ならん

サシ上　これは九州薩摩潟。鬼界が島の流人のうち

成経　「丹波の少将成経

康頼　「平判官入道康頼。二人が果てはあり。われら都にありし時。熊野詣三十三度の歩みを

あきんと立願せしよ。その半ばも數足
らぞかゝる遠流の身となれぞ所願も
空しくはやなりぬ。せめての事のあま
りよや。此島よ三熊野を勧請申し。都
よりの道中の。九十九所の王子まで

下歌

ことごとく順禮の。神路よ幣を捧げ
つゝ。

上歌

とてもとても。同じ宮居と三熊

野の同じ宮居を三熊野の浦の濱
木綿一重なる麻衣の袖をも唯
其まゝの白衣にて眞砂をとりて散
米に白木綿花の袖して神に歩を
運ぶなり神に歩をはこぶなり。
（俊寛上）後の世を待たで鬼界が島守と（地）なる
身の果の冥きより（俊寛中）冥き道ぞ。

ありける 玉兎晝眠る雲母の地。金鶏夜宿す不萠の枝。寒蝉枯木を抱きて。鳴き盡くして頭を回らさず。俊寛が身の上に知られて候

康頼詞 あれなるハ俊寛にてわたり候か。これまでハ何のために御出でそて候ぞ

俊寛 早くも御覧じ咎めたり。道迎へのその為に

酒を持ちて参りて候　康頼「そも一酒とハ竹葉の此島にあるべきかと。立ち寄り見れバ。やこれハ水なり　俊寛「これハ御手にていへども。それ酒と申す事ハ。もとこれ薬の水なれバ。醴酒にてなどなかるべき

康頼 成経「カヽル上 げよくこれぞ理なり。頃ハ長月

俊寛「時ハ重陽　康頼 成経「處ハ山路　俊寛「谷水の

●獨吟

俊寛 康頼 成經 上 ヨワク

彭祖ゲ七百歳を經しも。心を汲み
えし深谷の水

地上歌

飲むからにげにも
藥と菊水のげにも藥と菊水の。心の
底も白衣の。濡れて干す山路の菊の
露のまにわれも千年を經る心地する。
配所はさてもいつまでぞ。春過ぎ夏
たけて又。秋暮れ冬の來るをも。草木

の色ぞ知らまするや。あら戀しの昔や。
思出は何につけても。あはれ都にあり
し時は。法勝寺法成寺唯喜見城の
春の花。今はかへつて。五衰
滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃。
飲む酒は谷水の。流るゝも又涙川水
上は。われなるものを。物思ふ時しもは

今こそ限りありけれ。早舟の。心に
適ふ追風にて。舟子やいそぐ。勇むらん
いかに此島に流され人の御座候か。都
より赦免状を持ちて参りて候。急いで
御拝見候へ　俊寛「あらありがたや候。やがて
康頼御覧候へ」　康頼「何々中宮御産の
御祈のために。非常の大赦行はるゝ

よより。國〻の流人赦免ある。中にも
鬼界が島の流人のうち。丹波の少将
成經。平判官入道康頼二人赦免
ある所なり 俊寛「何とて俊寛をば讀み
落し給ふぞ 康頼「御名はあらばこそ。赦免
状の面をも御覧候へ」 俊寛「さては筆者の
誤か 赦免使「いや某都まで承りしも。康頼

成經二人ハ御供申せ。俊寛一人をば

此島に殘し申せとの御事にて候

●擲吟

俊寛上 ヨワク

●とはいかに罪も同じ罪。配所も同じ

配所。非常も同じ大赦なるに。ひとり

誓の網にもれて。沈み果てなん事ハ

いかに 此程ハ三人一所にありつ

るだに。さも恐ろしく凄ましき。荒磯

島にたゞ一人。離れて海士の捨草の。浪の藻屑の寄るべもなくてあられんものかあさましや。歎くにかひも渚の千鳥。泣くばかりなるありさまかな。時を感じては花も涙をそゝぎ。別を恨みては鳥も心を動かせり。もとより此島は。鬼界が島と聞くなれば。

鬼ある處まて今生よりの冥途なり。
たとひいかなる鬼なりとこの哀なとか
知らざらん。天地を動かし鬼神も感
をなすなるも人の哀なるものを。此島
の鳥・獣もなくはわれをとふやらん
せめて思のあまりにや　さきに讀み
たる巻物を又ひき披き同じあとを。

繰り返し繰り返し見れども見れども唯成経康頼と書きたる其名ばかりありて。もしも礼紙にやあるらんと巻き返して見れども。僧都とも俊寛とも書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば。さめよかしと現なりき。俊寛が有様を見るこそ哀なりけれ。

赦免使カゝル上 ツヨク 時刻移りて遍よまず。成経康頼二人ハはやお舟よ召されゆへとよ 康頼 成経 ヨワク かくて

あるべき事ならねバよその歎をふり捨てゝ。二人ハ舟よのらんとす 俊寛付 僧都も舟よ乗らんとて。康頼の袂よすがりつけバ 赦免使カゝル上 ツヨク 僧都ハ舟よかなふまじと。

あらけなく云ひければ 俊寛付 うたて

やあ公の私といふことのあれば。せめて向の地までなりとも。情に乗せてたび給へ

赦免使上「情も知らぬ舟子ども。櫓櫂をふり上げ打たんとす

俊寛「さすが命のかぎりきよ。又立ち帰り出舟の。

赦免使「舟人

伯 纜よ取りつき引きとむる纜押し切つて。舟を漕みよ押し出させ

俊寛上「せん方浪にゆられながら。唯手を合せて舟よのう

赦免使「舟よといへど乗せざれば

俊寛「力及ばず俊寛が

地上「もとの渚にひれふして。松浦佐用姫も我が身にはよもまさじと。聲も惜まず泣き居たり

康頼・成経・赦免使 口上「痛はしの御事や。われら都に上りなばよきやうに申し直し

つゝやがて帰洛ハあるべし御心強く待ち給へ

俊寛上 帰洛を待てよとの呼ばゝる聲も幽なる。たのみを松陰よ。音を泣きさして聞きゐたり

三人上 聞くやいかにと夕波の。皆聲ゞに俊寛を

俊寛 申し直さば程もなく

二人 なぞ帰洛あるべしや

俊寛 これハ真か

二人 なかくよ

俊寛「頼むぞよ頼もしくて。待てよ待て
よといふ聲も。姿も。次第に遠ざ
かる沖つ波の。幽かなる聲絶えて舟
影も人影も消えて見えずなりに
けり跡消えて見えずなりにけり

文學博士 井上頼圀 本文監修
丸岡桂 本文訂正
觀世清之 節附訂正

稽古摘要

習ひたる師匠	
始めたる年月日	大正　年　月　日
終りたる年月日	大正　年　月　日
稽古	
感想	

發行所 東京市神田區今川小路三丁目九番地
電話番町三三〇九、振替東京一三四七五
觀世流改訂本刊行會

使用家の特權

觀世流改訂謡本の稽古本使用家は、其内組百十番百十冊、又は外組六十二番六十二冊、又は別能組二十八番二十八冊の各一組、或は三組を悉く買ひ揃へられ候節、返送料を添へて發行所へ送附せらるれば、裁切料は無料にて五番綴の美本に仕立直し御返送可申上候。かくして使用家は期せざるに一揃の五番綴謡本を得らるべく候

大正九年七月二十日印刷
大正九年七月三十日發行

大正版一番綴

發行者 東京市神田區今川小路三丁目九番地 土居源太郎
印刷者 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條愷
印刷所 東京市神田區佐久間町一丁目一番地 七條式金屬版印刷所